

## ■ 編集だより

### 編集後記

#### 現代人のヒュプリス

去る3月11日に突然起こった東日本大震災、またそれに連動して起こった原発事故はわれわれ日本人に、さらに人類全体に大きな試練を課すことになった。われわれの大学精神科は、心のケアチームを編成し、3月下旬より定期的に気仙沼に医療支援に行かせていただいた。私自身、その一員となり気仙沼に赴いた。避難所を訪問させていただき、被災された方からいくつか印象的な話を聞かせて頂いた。ある中年女性の方は、目をつぶると他人の手が見えてきて怖い、しかも、テレビで歌手が手を振って歌っている姿をみるとその手が怖いので、テレビを見ることができないという。話を聞いていくと、この人が見える、怖いと言っている手は、津波が押し寄せて来た際、海にさらわれていく人がもがき苦しみ、上に差し出していた手の残像に由来することが推察された。それは、人間の心的装置の許容能力を超えた大自然の力の爪痕にほかならない。

気仙沼の町に実際に足を運んでみて、その無残な被害をまのあたりにして、大自然の力の凄まじさを間近に感じた。印象的なことの1つは、辺り一面家が消滅しているのだが、その範囲が海から数kmに局限され、そこから先は目立った被害がないことだった。海から何mも離れていない、すぐ横とってよい場所に建てられた介護老人保健施設は、津波が押し入るところとなり、そこに入所していた多数の方々が海にさらわれたという。海のすぐ近くにこのような公的施設、また民家が多数建てられており、これらはことごとく全壊状態になっている。

科学的技術により「大津波にも耐える堅牢な防潮堤が作られた」という安心感から、以前に比べより多くの人が海のすぐ近くに住みだしたと思われる。その意味で、結果論のそしりはまぬがれないが、現代人は大自然の力をあなごった側面は否定しようがない。昔の人は、自然に対し畏怖の念を抱き、自然の力をなだめ、また自然の力に感謝する儀式や祈りを捧げるのを怠ることがなかった。古代・伝統社会であれば、人々は大きな地震や津波を大自然の怒りと受け取るのが常だったのではないだろうか？

今回の地震・津波、次いで原発事故は、大自然に対する畏怖の念を改めてもつことを促しているともみるのはあながち見当はずれではないだろう。それは、人間の力には限界があるという有限性の自覚につながる。

そこで思い出されるのはヨブ記である。何不自由なく裕福な生活を送っていた人格的にも優れたヨブは、突然、牛やらくだの略奪、牧童の殺害をはじめとした一連の韓非なき喪失を体験する。彼は激しい苦痛に襲われ、すっかり憔悴した状態に陥った。彼は神に向かい、「罪と悪がどれほどわたしにあるのでしょうか。わたしの罪咎示してください」と問う。しかし、神からはしかるべき返答はない。最終的にヨブは「わたしには理解できず、わたしの知識を越えた驚くべき御業をあげつらっておりました」と反省の言葉を神に述べる。その後、彼のもとに多数の羊やらくだがもたらされ、元の生活に戻ることができるようになったという。

ヨブ記では、人間存在がこの世で生きていることによる根源的負債、ないし原罪性が問われている。その問いは、神との関係性に立ち戻ることによって鮮明となる。日本人にとってもこの事情は基本的には変わらず、大自然が神の位置を占め、神との和解の試みが繰り返さされてきたと考えられる。

科学的真実こそが絶対的な真理であると確信した現代人は、大自然、ないし神に対する畏れとおのきの敬虔な感情を廃棄した。それは現代人のヒュプリスであることを今回の災害は教えているように思えてならない。最近アメリカで、トラウマを契機にこれに打ち克ち人格的な成長をみる事象を指す外傷後成長 (posttraumatic growth) の考え方に注目が集まっている。その際、私は人間のヒュプリスと根源的負債への内省が条件であると思いたい。今回の災害についていえば、この未曾有の出来事を大自然からの試練の贈りものと受け取る謙虚な姿勢があってはじめて、外傷後成長を期待できるのではないだろうか。(加藤 敏)